健康新聞 Vol.284 2023年(令和5年) 3月5日(日曜日)

命をつなぐ 小児がん 治療の現場から

第②回

# 小児白血病

## 2～6歳に発症のピーク
## 治療技術が進歩、7割超が治癒

「白血病」は最も多い小児がんで、発症数はわが国で年間約700人と推定されています。正常な血球、白血球・赤血球・血小板を作る工場である骨髄において、がん細胞である白血病細胞が無秩序に増殖してしまう病気です。発症のピークは2～6歳にあります。

白血病細胞の骨髄あるいは骨髄外への広がりによる症候がきっかけで見つかりますが、症状の期間は数日から数カ月までさまざまです。続く発熱や疲労感でかかりつけ医を受診した際に行った血液検査で疑われることが多いです。赤血球の減少による顔面や手のひらの白さ（貧血）、血小板が減ることで足やおしりの広範囲にできる点状の出血や青あざに気づく場合があります。

専門家はこれらわかりやすいサイン以外に、全身のリンパ節・肝臓・脾臓（ひぞう）の腫れ、睾丸（こうがん）の腫大を注意深く観察します。意外に知られていない症状の一つに骨の痛みや関節の痛みがあり、足を引きずったり、歩くことを拒否したりすることがあるため、整形外科からの紹介で診断に至る場合も多いです。

通常の血液検査では異常がないこともあるため、白血病を確定診断するためには骨髄穿刺（せんし）が必須となります。腸骨（こしぼね）のおしり側から針を刺し、骨髄液を採取して行う検査です。その後の適切な治療につなげるためにも、白血病細胞がもつ遺伝子異常の確認を含めた小児血液・がん専門医による評価が欠かせません。

治療は抗腫瘍薬（抗がん剤）による多剤併用化学療法を行います。白血病のタイプにもよりますが、6～12カ月の入院による治療ののち、再発予防のために外来での約1年半の治療が必要とされます。

1960～70年代には治療が難しい病気のイメージがあった小児白血病ですが、治療の進歩により治療成績は大きく改善し、現在では75～95％が治癒する時代となりました。なんとか困難を乗り越えてもらい、健康な大人としての社会生活を送ってもらうことが、私たち小児がんの医療に携わるものの心からの願いです。

次回は小児外科医が深くかかわる小児固形腫瘍についてお話させていただこうと思います。

● 小児白血病の症候 ●

四国こどもとおとなの医療センター　小児血液・腫瘍内科医長　小児血液・がん専門医　今井　剛